

# 琉球大学学術リポジトリ

## 技術・家庭科の男女相互乗り入れについて－附属中学校の実態－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2008-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 雅夫, 宜保, 美恵子, 比嘉, 善一, 幸地, ヒロ子, 平田, 哲也, Suzuki, Masao, Gibo, Mieko, Higa, Zenichi, Kochi, Hiroko, Hirata, Tetuya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/4690">http://hdl.handle.net/20.500.12000/4690</a>

# 技術・家庭科の男女相互乗り入れについて

—— 附属中学校の実態 ——

鈴木雅夫 宜保美恵子 比嘉善一  
幸地ヒロ子 平田哲也

“Mutual Extension” System on Technical and Home-  
making Education  
— The Actual Situation at Attached Junior High  
Schools—

Masao SUZUKI\* Mieko GIBO\* Zenichi HIGA\*\*  
Hiroko KOCHI\*\*\* Tetuya HIRATA\*\*\*

(Received August. 30, 1986)

## Summary

This study aims at an understanding on the actual situation of the “mutual extension” system, at attached junior high schools.

We asked for some information to teachers engaged in technical and homemaking education by questionnaires.

The results were as follows.

- 1) The typical contents of “mutual extension” were “Foods” for male students and “Woodworking” or “Electricity” for female students.
- 2) The typical school years of “mutual extension” were in the first grade.
- 3) And learning style of “mutual extension” were coeducational.

We also appreciate “mutual extension” system by coeducation and we are planning to implement the “mutual extension” system by coeducation starting 1988 at our attached junior high school.

---

\* Home Econ., Coll. of Edu., Univ. of the Ryukyus

\*\* Tech. Edu., Coll. of Edu., Univ. of the Ryukyus

\*\*\* Attached Junior High school, Coll. of Edu., Univ. of the Ryukyus

## I はじめに

文部省は、教育課程審議会が昭和51年12月に行った答申「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」に基づき技術・家庭科の明確化を図り、その目標を達成するために必要な事項を検討し、中学校学習指導要領「技術・家庭」を改訂した。

そして、10年後の昭和61年7月、総会において家庭科などについての基本的な改訂の方向を決定した。それによると女子差別撤廃条約などとの関係で早急な見直しを求められていた高校の「家庭一般」と中学校の「技術・家庭科」の領域及び履修形態の改訂を主な内容としている。

現行の中学校の「技術・家庭科」は、男子向きの技術系列が「木材加工」「金属加工」「機械」「電気」「栽培」、女子向きの家庭系列が「被服」「食物」「住居」「保育」の計9領域あり、男子は家庭系列から、女子は技術系列からそれぞれ1領域以上を選択し学ぶことになっている。

これに対して新しい答申は、現行の9領域に「家庭生活」と「情報基礎」を加えて11領域とし、このうち「木材加工」「電気」「食物」「家庭生活」の4領域は男女とも必修になり、従来の相互乗り入れという考え方でなく、これに3領域以上を選択で加え、3か年間で7領域以上を学ばせるというものである。

教育課程審議会は昭和62年12月までに最終的な答申をまとめ、これをもとに文部省は学習指導要領の改訂などの作業を行い、昭和68年度から実施される予定である。

このように新しい教育課程に移行するのは7年先のことであるが、男女共修の学習内容をどうするかなど、それまでに解決しなければならない課題がある。

九州地区の中学校技術・家庭科の実施状況については各県の報告<sup>1)</sup>で明らかにされている。それによると、相互乗り入れの最も多いのは、食物1と木材加工1、次に食物1と電気1の組み合わせになっている。その比率は各県の学校等の状況で異なっているものの、高率を占めている。男女相互乗り入れの成果と問題点は、男女相互の理解をはかるという点では望ましく、実習において生徒は協

力し合いながら楽しく取り組んでいると一応の成果を認めながらも、学習形態は別学が多く、食物1と木材加工1に片寄っていること、時間数が足りないこと、施設設備が不足して指導が困難なこと、技術・家庭科教師間の調整が十分でないことなどの問題点が指摘されている。

沖縄県内公立学校の技術・家庭科の教科運営の状況は、同研究会の実態調査によると、領域の選択率が90%を超えるものは、技術系列で木材加工1、2、金属加工1、2、機械1、2、電気1、2、家庭系列で被服1、2、3、食物1、2、3となっている。

相互乗り入れの実施学年は1年と3年に分かれ、乗り入れ領域は男子が食物1、女子が電気1と木材加工1に分かれることが多い。男子が、食物1以外に選択している領域は保育と住居であるが数%にすぎない。選択されにくい理由として「住居領域は時間配当の関係から履習させている学校は少ない。また、生徒の興味関心が薄いの現状である」と考察している。

教育課程審議会が改訂を決めた新しい領域の「家庭生活」は、実態からみて家庭系列に食物1以外、相互乗り入れできる領域が少なく、保育、住居等を含めた総合科目で対応しようというねらいがあるとみられる。

本研究は、今後の新しい動向をふまえながら、琉球大学教育学部に昭和59年度に設置された附属中学校において、技術・家庭科の男女相互乗り入れをどのように実施していくべきかという課題の検討を行ったものである。

附属中学校の技術・家庭科教官と教育学部技術教育科及び家政学科の教官で技術・家庭科研究会を設け、全国の附属中学校における男女相互乗り入れの実態調査を行い、その結果をもとに、よりよい指導計画を作成するための参考にすることを目的にした。

本論の構成は、全国附属中学校における相互乗り入れの実態と本学部附属中学校生徒の意識から成り、以上の考察をまとめ指導計画案を作成した。

## II 調査の方法

調査は全国大学一覽<sup>3)</sup>の中から国立大学附属中学

校74校を対象としてアンケート用紙を昭和61年6月に発送し、期日までに39校から回答があった。

アンケート用紙は各校に1部送付し、技術・家庭科の教師が相談して記入するように依頼した。

### Ⅲ 附属中学校の実態

#### 1 学校規模

学校規模は、10～15学級の中規模校が22校で最も多く、次ぎに6～9学級の小規模校が16校で、残りの1校が16学級以上であった。(表1)

表1 学級規模別学校数

学級数	6～9	10～15	16～21	計
学校数	16	22	1	39

#### 2 専用教室数

準備室を除く専用教室数は、技術室の場合は1室のみの学校が19校もあった。1室といっても2室以上の面積であるとの回答もみられたが、教科運営上からは2室に分けた方が使い易いと考えられる。

家庭科の場合は過半数が2室で、1室というのは10校であった。やはり被服、食物それぞれ独立した教室の確保が望ましい。(表2)

表2 専用教室数別学校数

室数	1室	2室	3室	計
技術室	19	18	2	39
家庭科室	10	29	0	39

#### 3 過当たり平均担当時間数

過当たりの平均担当時間数については、技術系列、家庭系列共に11～15時間が多く、次いで16～20時間、21時間以上は1校～2校のみであった。

(表3)

表3 過当たり平均担当時間数(技術・家庭科のみ)別学校数

時間数	6～10	11～15	16～20	21～	計
技術系列	1	26	11	1	39
家庭系列	2	22	13	2	39

#### 4 指導計画(昭和60年度実施)

指導計画については、技術系列(または家庭系列)のみの記入、無記入などの記入不備を除いた有効資料26部について考察した。

##### (1) 領域選択数

領域の選択数は、技術系列では、最も多いのが8領域、次いで7領域であった。家庭系列では、7領域が最も多く15校で、8領域及び6領域が各々5校であった。少数ではあるが、9領域以上選択したのが、技術系列で2校、家庭系列で1校あった。(表4)

表4 領域選択数別学校数

領域数	6	7	8	9
技術系列	4	9	11	2
家庭系列	5	15	5	1

##### (2) 領域別の履修状況

領域別の履修状況は、技術系列では、木工1、機械1、電気1。2の履修が高く、低いのは金工2であった。家庭系列では、被服1.2、食物1.2、保育が高く、住居は低い。26校中、1校に被服1の履修がみられなかった。「その他」の中には、既存の領域以外に「情報処理」や「美、技、家」の合科による「手織り」が取り上げられている学校もあった。(表5)

表5 領域別履修状況

技 術 系 列			家 庭 系 列		
領 域		学 校 数	領 域		学 校 数
木 工	1	26	被 服	1	25
	2	19		2	26
金 工	1	23		3	20
	2	9	食 物	1	26
機 械	1	25		2	26
	2	23		3	25
電 気	1	26	住 居		6
	2	26	保 育		25
栽 培		13	そ の 他 <sup>3)</sup>		3
そ の 他 <sup>1)</sup>		3	合 併 <sup>4)</sup>		4
合 併 <sup>2)</sup>		4			

- 1) その他 ・情報処理  
 ・美・技・家による合科  
 「手織り」等
- 2) 合 併 ・電気1. 2を3年で  
 ・機械1. 2を3年で  
 ・木工1. 2を2年で  
 ・金工1. 2を2年で

- 3) その他 ・手芸, ミシン, 製図  
 ・手織り

- 4) 合 併 ・食物1と2の一部を1年で  
 ・食物2の一部と食物3を3年で  
 ・被服2. 3を3年  
 ・食物2. 4を3年

(3) 履修学年

標準履修学年との比較でみると、技術系列では、8校が機械1を3年で履修させていた。

家庭系列では、被服1を2年で、被服2を3年で、また食物2. 3を3年で履修させている学校もある。(表6)

表6 履 修 学 年

	領 域		標準履修学年の学校数	標準履修学年以外の学校数	不 明
技 術 系 列	木 工	1	24	2	
		2	19		1
	金 工	1	23		
		2	6	3	
	機 械	1	17	8	
		2	23		
電 気	1	25		1	
	2	26			
	栽 培		13		
家 庭 系 列	被 服	1	16	8	2
		2	18	7	1
		3	18		2
	食 物	1	23	1	2
		2	23	1	2
		3	25		
	住 居 保 育		5	1	
			25		

(4) 題材

題材については、郷土に関する題材（被服3でさし子，紅花染）を取り上げた学校も1校あったが、殆どが教科書通りで特徴のある題材はみられなかった。

(5) 配当時間数

学習指導要領の「1領域に当てる授業時間数は、20単位時間から35単位時間を標準とする」からすると、平均時間数では技術系列、

家庭系列共に条件を充たしている。しかし、最小時間数をみると、金工1及び栽培の10時間、住居の17時間、保育の15時間は授業時間数が少なく、指導事項が充分押さえられていないのではないだろうか。また最大時間数でみると、40時間を越えた領域も多く、1校ではあるが食物3で48時間当てている学校もあった。1領域に当てる時間数が多いと、他の領域へのしわよせも考えられる。（表7）

表7 配当時間数

技 術 系 列				家 庭 系 列			
領 域	M I N	M	M A X	領 域	M I N	M	M A X
木 工	1	20	29.6	被 服	1	20	31.6
	2	20	31.2		2	20	30.6
金 工	1	10	27.8	3	20	33.1	40
	2	15	23.7	食 物	1	20	29.5
機 械	1	15	26.8		2	20	28.7
	2	20	32.1		3	22	33.9
電 気	1	19	26.8	住 居	17	20.4	25
	2	20	32.8	保 育	15	29.4	35
栽 培	10	26.3	35				

(6) 実習に当てる時間数

技術系列では、平均でみると11.0～20.4時間の範囲にあるが、最小時間は電気1の5時間である。家庭系列では、平均10.7～25.4で、最も少ないのは保育の5時間である。全体的にみて実習時間は極端に少ないところと、

配当時間の殆どを実習時間に当てている学校がみられる。教科の性格上、実習を通して教科への興味、関心、理解を深める事は当然のことであるが、極端に理論や実習に偏ることはさげなければならないと思う。（表8、9）

表8 実習時間（技術系列）

領 域	M I N		M		M A X		
	予 定	実 施	予 定	実 施	予 定	実 施	
木 工	1	10	9	16.1	17.4	25	30
	2	15	9	20.4	20.6	35	35
金 工	1	10	8	14.9	15.1	30	32
	2	12	7	14.6	13.7	18	20
機 械	1	8	7	12.8	12.5	20	24
	2	6	4	13.2	12.2	35	30
電 気	1	5	5	11.0	12.5	25	30
	2	8	8	16.8	16.2	35	37
栽 培	6	6	19.7	19.2	35	31	

表9 実習時間（家庭系列）

領域	MIN		M		MAX		
	予定	実施	予定	実施	予定	実施	
被服	1	15	14	20.3	22.8	33	35
	2	8	10	22.1	24.7	35	35
	3	15	15	25.4	25.1	35	35
食物	1	6	6	15.5	15.0	35	30
	2	8	8	17.4	16.1	23	25
	3	8	8	16.2	15.5	35	26
住居	6	6	6	10.7	9.3	20	16
保育	5	5	5	15.4	15.7	35	31

#### IV 附属中学校の相互乗り入れの実態

##### 1 男女相互乗り入れの趣旨について

男女相互乗り入れの趣旨についてみると、「男女の特性を理解し、社会生活や家庭生活における男女の役割とそれぞれに応じた協力の仕方の素地を養う」が15校で最も多い。次に「男女の特性を理解し、それぞれの特性が生かせるよう助け合う素地を養う」が11校である。3位と4位は「自己の特性の発見、個性の伸長」「男女の特性にこだわらず一緒にやる」になる。

中学校指導書<sup>4)</sup>によれば「男女の相互理解と協力を図るための措置として、男子には技術系列の領域のほか家庭系列の領域も履修させ、女子には家庭系列の領域のほか技術系列の領域も履修させることを原則にしている」と男女相互乗り入れの観点を示している。

この観点からすれば、必ずしも男女の役割とそれに伴った協力の仕方まで規定しているわけではなく、1位はこの趣旨に該当してないとみられるし、いまだに男女の役割観が強いことを調査結果は示している。

##### 2 相互乗り入れの領域数について

相互乗り入れは、それぞれの系列から1領域以上を選択して履習させるように定めているが、相互乗り入れをしていない学校が3校<sup>※</sup>ある。1領域が23校、2～3領域が13校ある。

##### 3 相互乗り入れの形態について

相互乗り入れを実施している36校中、22校が男女共学、13校が男女別学となっていて、共学が別学を上回っている。その他が1校<sup>※※</sup>ある。

##### 4 授業の担当方法について

技術系列は技術担当教師、家庭系列は家庭担当教師が行う場合がほとんどであり、37校中33校になる。男子は技術担当教師、女子は家庭担当教師が行う場合は2校ある。この場合、免許外の教科を教えることになるので問題が残る。家庭担当の教師は免許科目の中で家庭機械及び家庭電気、家庭工作を学んできているため、電気1及び木材加工1は指導できるかも知れないが、技術担当の教師は食物1を免許科目として学んできていない。従って、技術・家庭科のように教科が1つであれば、大学のカリキュラム及び免許のあり方もこれにあわせて何らかの改善が必要ではないかと思われる。またその他が2校あった。

※ 男女の人員比率が2：1であるため編成しにくい。

※※ 別学と共学を同時に実施している（1年は共学2年は別学）

## 5 相互乗り入れの題材について

男生徒と女生徒で題材を「変える必要がない」とする学校が36校中20校で最も多い。次に、「一部変える必要がある」は14校、「変える必要がある」は2校である。それぞれの理由をみると

- 1) 「変える必要がある」の場合
  - ア) 時間数, 能力 (経験を含む), 興味
  - イ) 他の領域の内容の中にも生活に必要な内容が多い。
  - ウ) 技術面, 関心, 技能への配慮などをあげている。
- 2) 「一部変える必要がある」の場合は,
  - ア) 男女の体力差。
  - イ) 学習する学年, 既習経験や興味関心の差。
  - ウ) 男子向き, 女子向きといった領域ごとの固定観念が十分払拭されていないので技能面に性差が生じている。
  - エ) 指導する教師側の共通理解が十分得にくい。
  - オ) 時間数が異なるため。などをあげている。
- 3) 「変える必要がない」の場合は,
  - ア) 本校の方針である。
  - イ) 1年生では性差はないから。
  - ウ) 男女共学なので, それを前提に題材を決めている。
  - エ) 人間として学ばねばならないことは男女共に同じであると思う。
  - オ) 興味関心の深さは違うが身につけるべき能力は同じだから。
  - カ) 中学の段階では特に男女の差がない。
  - キ) 題材の工夫や教材の取り扱い方, 指導の如何によっては, 男女共通に理解させられるので, 男女差をさぼど意識する必要はない。
  - ク) 男女差のない内容を指導すべきだと考えている。などをあげている。

## 6 男女共学でのグループ編成について

「男女混成のグループがよい」とする学校が29校, 「男女別々がよい」3校となっている。その他が4校ある。

- 1) 「男女別々がよい」理由として,
  - ア) 個々の確実な学習をはかり, グループ間

の観察と協力で学習の多様化がはかれる, などをあげている。

### 2) 「男女混成がよい」理由としては

- ア) 男女にこだわらず, 個々の特性を生かせ, 助けあえる素地を養うことを目的にしており, 生活班と同様の男女混成が望ましい。
- イ) 情意面での男女の特性を生かしたい。
- ウ) 学級で活用している班をそのまま使う方が学級指導の成果をとりいれられる。
- エ) 義務教育は本来男女共学であり, 別に異和感はない。
- オ) 協力して良さが発揮できる。

などをあげている。

その他と回答した学校は, その理由を男女別々にすると女子が消極的になることがありまた逆に男子か女子の力がグループの中で必要な場合もあるなどと, どちらとも言えないという立場をとっている。

## 7 リーダーの選び方について

リーダーは「能力適性を考えてきめるべきで, 特別にこだわらない」が36校中35校であり, 1校がその他と回答している。「家庭系列は女子, 技術系列は男子」がよいという学校はなかった。

## 8 相互乗り入れ実施後の生徒の反応及び改善すべき点について (自由記述式調査結果を原文のまま掲載)

### 1) 生徒の反応

- ア) 第1学年に担当しているためか意欲的に学習している。
- イ) 相互乗り入れで扱う領域はいずれも基礎, 基本の定着をねらっているから, これが身につくことによって, その後の学習の活力になっている。男女の協力の点では, はじめもめている班も自分たちで話し合いルールを作り解決へと努力している。
- ウ) 部分的であるが20年ほど前から実施しているので, 生徒, 父母, 教師とも抵抗は全くない。保育の共通学習は男子の反応を危惧して踏み切れないでいる。
- エ) 真剣に取り組んでいる。
- オ) 苦勞して製作して完成した喜び, 習った



技術，作品を日常生活に活用できる。他の教科と同様，男女共学は別に不都合はない。

- カ) 小学校の家庭科の延長のようで特別な意識はないように思う。
- キ) 男子の食物1の場合，実習のみを希望する傾向がある。
- ク) 製作学習のない領域は実習になれている生徒になじみにくい。女子が技術系列に優れた能力を持っている事がある。
- ケ) 男子は楽しく学習しているが，女子は家庭系列がよいとしている。
- コ) 1年で共学だったのが2年で別学になり，その不自然さを訴えることはある。
- サ) 男女それぞれの学習内容が理解できてよかった。協力はやや不足しているが意欲的に取り組んだ。
- シ) 乗り入れについては当然のこととして受け入れている様子，3年の選択教科では技術，家庭とも共学で実施している。
- ス) 1年に共学を実施したことがあり，その学年は3年になっても女子が技術系列に関心を持ち，選択の時になって技術系列を選んでくるので，技術は男子といった先入観はとり除くことができる。
- セ) 1年は男女の協力もよくできて楽しく充実して学習できたが2年は時間がたりないし技術系列では女子の理解が不十分であった。
- ソ) 男女とも題材に興味があれば意欲的に取り組んでいる。また，興味がなくとも学習しているうちに興味がわいてくる。
- タ) 自然な形で受けとめているので特に反応はない，女子でも電気2のトランジスタ，機械2のエンジンに対する興味は強い。
- チ) めずらしさ，楽しさを感じ喜んでいる。もっと学習したいと意欲をもっている。

## 2) 改善すべき点

- ア) 相互乗り入れの趣旨を生徒に理解させる必要がある。
- イ) 領域や題材の事前調査が必要である。

ウ) 相互乗り入れよりも教科としての系統性をいかに築くかが問題である。

- エ) 安全教育など実践する時間がたりない。
- オ) 1年生の1学期から共学にすれば自然であった。
- カ) 内容の充実と時間の確保
- キ) 調理上の性質等を深く考えようとする姿勢が欠けている。
- ク) 生徒の指導，管理上，1年で相互乗り入れをする方がよく，2年では自我発達等で男生徒を女の先生が指導するのはきびしい気がする。
- ケ) 各系列ごとに学習内容や指導事項をどこまで下げていけばよいのか見通しが必要である。共学，別学それぞれおさえるところがあってもよいと思う。題材の選択と構成を一工夫し，既習事項と次の段階へのつながりとを系統図で示しておくことよい。
- コ) 従来の領域+1領域を共学にしたため，いそがしくあわただしかった。
- サ) それぞれの領域で用語の意味や工具の取り扱い方を従来よりも丁寧に説明する必要がある。
- シ) 木工1や被服など製作時間がかかりすぎる。

## 9 相互乗り入れの指導計画及び作成にあたって配慮した点について

### (1) 実施した指導計画

履修時間数は，20～27時間が最も多く，次に28～35時間である。問題は20時間未満の配当である。各領域でそれぞれ1～2校づつある。(表10)

表10 男女相互乗り入れ  
領域別配当時数別学校数

系列	配当時数		20未満	20～27	28～35	36以上	不明	平均(時間)
	領域							
技術系列	木材加工	1	1	13	8	2	1	29.6
	木材加工	2	1	—	—	—	—	17.0
	電気	1	2	8	1	—	1	21.9
	金属加工	1	2	—	3	—	1	26.3
	機械	1	1	2	1	—	—	19.3
	栽培	1	1	—	—	—	—	10.0
家庭系列	食物	1	2	18	12	—	1	26.3
	食物	2	—	1	—	—	1	25.0
	食物	1.2	—	—	—	1	—	45.0
	保育		2	2	—	—	—	17.8
	住居		1	5	—	—	—	19.5
	被服	1	1	—	1	—	—	26.5
	合計		14	49	26	3	5	

履修学年は、両系列とも1年が多い。領域の内容や男女相互乗り入れのしやすさから決められたものとされる。技術系列の電気1が2～3年にきていることと対応して、食物1の一部が2年にくる。(表11)

表11 男女相互乗り入れ  
領域別履修学年別学校数

系列	学年		1	2	3
	領域				
技術系列	木材加工	1	21	4	—
	木材加工	2	1	—	—
	電気	1	—	7	5
	金属加工	1	3	3	—
	機械	1	—	3	1
	栽培		—	—	1
家庭系列	食物	1	24	8	1
	食物	2	1	1	—
	食物	1.2	1	—	—
	保育		—	—	4
	住居		—	5	1
	被服	1	2	—	—

系列別に選択された領域をみると、技術系列では、木材加工1が25校、次に電気1が12校であり、金属加工1、機械1と数校ずつ続く、家庭系列では、食物1が32校で特に多く、次に住居と保育が数校ずつ続く、技術系列に比べて家庭系列は食物1に集中している。(表12)

相互乗り入れ領域数は1領域が24校で最も多く、2領域は6校、3領域が1校ある。各系列の領域数が不規則な場合が5校ある。(表13)

表12 男女相互乗り入れ  
領域別選択数

系列	領 域	選 択 数
技 術 系 列	木 材 加 工 1	25
	木 材 加 工 2	1
	電 気 1	12
	金 属 加 工 1	6
	機 械 1	4
	栽 培	1
家 庭 系 列	食 物 1	32
	食 物 2	2
	食 物 1.2	1
	保 育	3
	住 居	6
	被 服 1	2

表13 男女相互乗り入れ数別領域組合せ別学校数

系 列	領 域	乗り入れ数		1						2			3	不 規 則						
		1	2	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	4	5			
技 術 系 列	木 材 加 工 1	○							○		○	○	○	○	○	○	○	○		
	” 2																	○		
	電 気 1		○		○					○		○	○	○	○		○		○	
	金 属 加 工 1				○					○	○									
	機 械 1							○							○	○		○		
	栽 培																		○	
家 庭 系 列	食 物 1	○	○	○		○				○		○	○	○	○	○	○	○		
	食 物 2								○				○							
	食 物 1.2										○									
	保 育									○					○					
	住 居					○					○			○	○				○	○
	被 服 1											○						○		
学 校 数		15	3	3	1	1	1			2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

題材については、特に男女相互乗り入れを意識して工夫したと思われるものは見当たらない。木材加工1では、マガジンラック、本箱（本立て）、カセットケース、ホワイトボード、レターラック（状差し）、飾り棚、サービス盆、花台、自由作

品等の製作である。食物1では、カレー汁、ムニエル、さつま汁、おにぎり、ソテー、豚カツ、米飯、たまご焼等の調理をとりあげている。

(2) 指導計画作成上の留意点について  
(自由記述式調査結果を原文のまま掲載)

## 1) 履習時間について

- ア) 1, 2 学年では35単位時間を基準に30時間で仕上げるようにした。
- イ) 25時間の予定で内容を考慮し実施に入るが行事や祝祭日等で欠課があり時数が不足する。
- ウ) 全体の履修領域を8にし, 1~2学年は2領域にしてあるので, 相互乗り入れは35時間とした。
- エ) 最低時数は20時間で終了とした。
- オ) 20~25時間は確保したい, およそ22時間が適当である。
- カ) 35時間使ってじっくり取り組ませたいと考える。
- キ) 1年週2時間のうち前, 後期に分けて技術と家庭を共学にした。
- ク) 学期途中で元にもどすため20時間位と短くきめた。
- ケ) 1学年では35時間が是非必要であり, 3学年では15時間程度でも仕方がない。
- コ) 1学年の配当時間を週3時間とし, 小学校とのつながりを考慮した。

## 2) 履習学年について

- ア) 小学校からの系統性と発達度を考慮して第1学年に配当する。
- イ) 男女相互乗り入れがスムーズにいきやすい1, 2年生に決めた。
- ウ) 技術・家庭の理解を深めてからがよいと思えるため, 今後は2年生に実施したい。
- エ) 小学校の家庭科学習に引き続き1, 2学年の1学期は1, 3組を技術系列, 2, 4組を家庭系列にし, 2学期はこの逆に行う。
- オ) 1年生が適当であるが, 1年では基本的なしつけを男女別に徹底させ, 2年にした。
- カ) 学習の内容から「大人として生きる」ということを考えて最終学年を考えた。
- キ) 男子は1年, 女子は2年とした。
- ク) 男子に食物をとりあげる場合, 2年生の後半が適切である。
- ケ) 履修内容にゆとりのある1年と3年に

した。

- コ) 1年で行っているが各学年1領域ずつ広げていきたい。
- ## 3) 履習領域について
- ア) 第1学年では領域が指定されていておのずと限定される。
  - イ) 生徒の希望調査を参考にした。
  - ウ) 各領域の基礎である木工と食物を選んだ。
  - エ) 限られた時間数なので, 領域としてのまとまりよりも, 精選された内容を含ませる工夫に重点をおく。
  - オ) 女子にとって電気, 木工, 栽培はどの領域でも好評である。
  - カ) 実際の生活で役に立つ領域を選ぶ。
  - キ) 父兄, 卒業生, 在校生にアンケートをとり参考にしたが, 我々教師の考えと一致していた。
  - ク) 現在は木工1と食物1だけであるが将来はもっとひろげていきたい。
  - ケ) 技術と家庭の教師が相談しあって検討した。
  - コ) 生徒の人数を30人以上におさえる必要がある。
- ## 4) 題材について
- ア) 日常生活で活用でき発展性のあるもの。
  - イ) 同一題材で行うことを基本に, 男女の特性を考慮して指導展開を工夫した。
  - ウ) 少ない時数で将来の生活で身につけさせておきたい基礎・基本をおさえながら発達段階に即し, 安易すぎず無理のないものを心がけた。
  - エ) 自分が製作したいという必要感をいだいたもの。
  - オ) スポットライトの製作は, 電気及び金属加工を統合して学ばせることができる。
  - カ) 能力と時数からみて製作し完成できるもの, 材料費は多少高くても価値あるもの。
  - キ) わかりやすく簡単で手早く作成できるもの, 時間をとる製作題材は選べないのが現状である。
  - ク) 時間内に基礎がおさえられるものに精

選した。

ケ) 楽しく学習できるもので、自主教材、  
題材をできるだけ使用する。

コ) キットは使わず素材を使うようにし、  
複数の題材で指導する。

## 10 附属中学校における男女相互乗り入れの傾向

以上の調査結果から男女相互乗り入れの傾向を概観すれば、附属学校は公立学校に比べて、実験学校的な性格が強く、独自の新しい授業実践が試みられているのではないかという期待もあったが、特にそのような傾向はみられなかった。

男女相互乗り入れの趣旨の理解にみられる教師の意識では、男女の役割観が強いにもかかわらず、履修形態は男女共学が別学を上回り、題材は男女で「変える必要がない」が「変える必要がある」を上回るなど、積極的な面がみられる。グループ編成及びリーダーの選び方においても、男女の性別にこだわっていない学校が多い。

これまで実践してきた結果については、全体として、1年生から相互乗り入れで共学を実施するのが生徒の反応がよく、高学年になるとやりにくいといった反省が出ている。

指導計画及び作成上の留意点をみると、1年生において相互乗り入れを実施すれば、領域は、おおそ食物1と木材加工1に限定されてくる。履修の配当時数は、指導書に示された20～35単位時間の枠の中にほとんどが含まれているものの、平均をとると1領域30単位時間を下回っている。製作など実習を主体とする領域では、30単位時間以上は必要とおもわれるが、相互乗り入れでは時間が充分確保されていないようである。

## V 本学部附属中学校の実態

附属中学校は昭和60年に開校され、附属小学校から120名を受け入れ、その他の公立小学校から40名を公募して、現在1、2年生の4学級160名づつ320名が在籍している。

技術・家庭科の実習室は、特別教室棟にあって、技術教室は準備室をはさんで木工室（製図）と金工室（機械、電気）、別棟に油脂庫、集塵機室が付いている。栽培園の管理作業との関連で1階に

配置してある。家庭科室は2階に配置し、準備室をはさんで被服室と調理室に分かれている。バルコニーに洗濯、物干しコーナーを設けている。

教官の定員は技術と家庭科それぞれ1人づつ配置されている。

教育実習が昭和61年度から始まっているが、準備の段階でもあり、数名の実習生を受け入れ、試行を行っている。

沖縄県の公立学校においては、約90%が半学級制を実施している。本校においても、技術教室の広さは標準面積に満たないため安全作業の面から不安があり、且つ、学習効果は期待できないので本校においても半学級制を進める必要があると思われる。

## VI 本学部附属中学校における生徒の意識

### 1 調査概要

第1回調査は昭和60年12月、第2回調査は昭和61年6月、1、2年生の男女各80名を対象に実施した。調査項目は、1) 9教科の好きな順位及び技能教科の好きな順位、2) 技術・家庭科の10領域のうち履修希望の順位、3) 技術・家庭科の男女共修の意識。

集計は男子については技術担当教師が女子については家庭担当教師が行った。この中から一部をとりあげて考察する。

### 2 技術・家庭科の男女共修について

男女共学がよいか別学がよいか、第1回と第2回でほとんど同じ傾向を示している。第2回では、「どちらでもよい」が38%で最も比率が高く、これに「どちらがよいかわからない」の12%を加えると、はっきりしない生徒の比率は50%を占める。残りの半数のうち、「別学がよい」が26%で「共学がよい」の24%を上回っているものの、ほとんど差はない。

「別学がよい」とする生徒の理由は、特に「男女別々のクラスで授業を受けた方がより楽しいから」が多くなっている。しかし、教師の指導のし

---

※ 機械と工作台の面積を除いた、木工室の生徒1人当りの床面積は0.8㎡である。

かたによって、「共学の方がより楽しい」というふうになる可能性も大いにある。従って、履習形態の共学か別学かは半数を占めるはっきりしない生徒達への教師側からの働きかけしだいで決定できると思われる。(表14)

表14 技術・家庭科の男女共修意識 (男子)

(単位%)

学年	1		2	
	男	女	共	学
男女共学	24		20	
男女別学	26		26	
どちらでもよい	38		39	
わからない	12		15	

### 3 技術・家庭科に対する男生徒の意識

9教科の中で好きな順位をしらべると、技術・家庭科は、AからCランクまで平均で30%前後の生徒が並び、特定の順位に集中する傾向はない。これは、体育のように上位に集中したり、音楽や美術のように下位に集中する教科と異なって、好き嫌いがはっきりしない。(表15)

表15 9教科の学年別評価 (男子)

(単位%)

教科	A		B		C	
	1	2	1	2	1	2
体育	69	61	18	22	13	17
理科	32	50	36	34	34	16
数学	31	41	27	37	42	22
英語	44	39	42	46	14	15
技・家	30	36	45	34	25	30
国語	14	29	43	34	43	37
社会	31	25	27	43	42	32
音楽	34	19	32	26	35	55
美術	11	15	29	29	60	56

(注) A 1～3位まで 好き  
 B 4～6 " 普通  
 C 7～9 " 嫌い

これを技能教科(音, 美, 体, 技・家)についてみるとはっきりする。体育は上位, 美術は下位, 技術・家庭は中位に集中する。音楽は1年生と2年生でやや異なる。(表16)

表16 技能教科の学年別順位 (男子)

(単位%)

教科	1		2		3		4	
	1	2	1	2	1	2	1	2
体育	70	62	11	14	15	14	4	10
音楽	19	11	39	21	21	30	21	38
技・家	8	20	38	41	40	33	14	6
美術	1	9	16	26	21	28	61	38

### 4 領域の履習希望

技術・家庭科の10領域のうち履習希望の順位をみると、男子では機械, 電気, 金属加工は上位, 木材加工と食物は中位, 住居, 製図, 栽培, 保育, 被服は下位に集中している。木材加工は1年生と2年生でやや異なっているが、全体として同じ傾向を示している。家庭系列の中で食物の希望が高く、このことが、相互乗り入れで男子に選択させる根拠の1つとなっている。(表17)

表17 技術・家庭科の領域別学年別評価 (男子)

(単位%)

領域	A		B		C	
	1	2	1	2	1	2
金工	51	64	39	27	10	9
機械	69	56	22	32	9	12
電気	67	44	24	39	9	17
木工	47	36	46	55	7	9
食物	25	30	45	43	30	27
住居	11	13	29	32	60	55
製図	10	9	35	28	55	63
被服	9	5	16	12	75	83
保育	3	5	11	16	86	79
栽培	12	4	45	34	30	62

女子では、男子の場合と異なって家庭系列を希望する順位が高い。1年生、2年生とも食物、被服、保育の領域が上位を占める。住居、木材加工及び栽培は中位、その他の技術系列は下位に集中している。(表18)

表18 技術・家庭科の領域別学年別評価(女子)  
(単位%)

領域	評価 学年		A		B		C	
	1	2	1	2	1	2	1	2
食物	87	64	9	19	2	13		
保育	43	48	29	18	28	25		
被服	60	45	19	31	21	18		
木工	11	33	50	39	39	25		
住居	34	31	41	31	25	31		
栽培	28	16	38	35	34	43		
機械	8	15	24	30	68	51		
電気	6	10	18	23	76	63		
金工	2	10	32	29	66	55		
製図	22	10	48	24	30	59		

昭和51年に実施された沖縄県内の生徒を対象とした意識調査の結果をみても、男子と女子の学習したいと希望している領域の順位は、今回の附属中学校の結果とほぼ同じ傾向を示している。

このような意識調査は、学習する前と後では異なってくることも考えられるので、その点を考慮して判断しなければならない。例えば、女子に対して行った「技術・家庭科の勉強は好きですか」に対する回答は、「好き」が1年生の68%が2年生では44%に低下していること。「被服製作は好きですか」に対する回答は「好き」が1年生の59%が2年生では36%と低下している。

調理実習や実験についても比率は小さいが同じような傾向があり、授業を受ける前後の意識に差異がみられる。(表19)

表19 技術・家庭科の領域別学年別好き嫌い

(女子)  
(単位%)

領域 学年	被服製作		調理実習実験	
	1	2	1	2
好 き	59	36	95	80
どちらでもない	30	55	4	17
嫌 い	11	9	1	3

従って、生徒の希望が上位だからということだけを根拠に、選択領域を決めるべきではなく、希望が下位でも、題材や教師の指導の仕方次第で学習後、上位に変わる可能性も有り得る。

崎浜は「男生徒及び女生徒に対してどの領域を学習させるのが適当か」について県内の技術・家庭科教員及び中学校3年生の父母を対象に意識調査を実施している。

これは、生徒の側からの希望に加えて、家庭や社会の要求としての父母の要望や意見を取り入れ、より客観的な立場から、より具体的な指導計画をたてるための資料を得ようとしたものである。

現実には、学校の教員組織や施設設備の現状などの制約があって、各学校に適したそれぞれの指導計画が作成されることになる。

## Ⅶ 本学部附属中学校の指導計画案の作成

すでに調査結果でみてきたように相互乗り入れは、小学校からの連続として中学校1年に取り入れるのが自然であり、その後の授業をやりやすくすると思われるので、昭和63年度入学の1年生からは、木材加工1と食物1の領域を相互乗り入れにする予定である。教育実習との関係で、4～6月の観察実習の時期に設定する。題材は木材加工1でテッシュペーパー入れ等、食物1では郷土料理のイナムドウチ等を計画している。(表20)

※ 沖縄の祝料理に欠かせない味噌汁の一種

表20 昭和63年度 技術・家庭科指導計画案 琉球大学教育学部附属中学校

学期	1 学期				2 学期				3 学期				計																					
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	3月																						
学年	3	3	4	2	3	4	4	3	3	4	2		35																					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
第一学年	食	物	1	(20)	木	工	1	(25)	金				工	1	(25)					70	時間													
	(イナムドゥチ)等				(カセットラック)等								(トールボックス)																					
第二学年	木	工	1	(20)	被	服	1	(20)	食				物	1	(30)					70	時間													
	(テッシュュベーパー入れ)等				(スモック)								(イナムドゥチ)等																					
第三学年	木	工	2	(25)	金	工	2	(20)	電				気	1	(25)					70	時間													
	(腰掛)等				(ドライバ)等								(蛍光灯)等																					
第三学年	機	械	1.	2	(35)	食				物	2	(35)	被				服	2	(35)					105	時間									
	(2-4サイクル機関)等				青少年向きの献立と調理(チンビン)等								日常着の製作(スカート)																					
第三学年	栽培				電				気	2	(35)	食				物	3	(35)					105	時間										
	(けんがいの菊)												成人向きの献立と調理(たきこみ飯)等																					



表 21 昭和 62 年度 技術・家庭科指導計画案 琉球大学教育学部附属中学校

学期	1 学期				2 学期				3 学期				計																					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月																						
学年	3	3	4	2	3	4	4	4	3	3	4	2	35																					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
第一学年	男子				金 工 1 (35) (トールボックス) 等				木 工 1 (35) (マガジンラック) 等				70 時間																					
	女子				被 服 1 (35) (スモック)				食 物 1 (35) 青少年向きの献立と調理(イナムドゥッチ)等																									
第二学年	男子				金 工 2 (25) (ドライパー) 等				木 工 2 (25) (腰掛) 等				70 時間																					
	女子				食 物 2 (35) 青少年向きの献立と調理(チンビン)等				被 服 2 (35) 日常着の製作(スカート)																									
第三学年	男子				食 物 1 (20) (カレージ) 等				電 気 2 (25) (インターホン) 等				105 時間																					
	女子				木 工 1 (20) (チッシュペーパー入れ) 等				被 服 3 (35) 休養着の製作(パジャマ)																									
				栽 培 (35) (けんがいの菊)				機 械 1・2 (25) (2-4サイクルの機関) 等																										
				保 育 (20) (ぬいぐるみ) 等				食 物 3 (30) 成人向きの献立と調理 (炊きこみ飯) 等																										

昭和61年度及び62年度は、学年進行の都合で3年生で男女相互乗り入れを実施する。(表21)

男女相互乗り入れは、別学の場合、技術系列は技術の教師が女子を、家庭系列は家庭の教師が男子を指導する。3年生に対しては別学で実施するが、1年生に対しては共学で実施する方向で検討することになっている。

当面はこのような方式で男女相互乗り入れを実施していくが、数年後には学習指導要領が改訂され、男女とも4領域の必修が確定しているため、新しく設定される「家庭生活」の内容が、男女生徒への指導をどのような実践活動を通して理解させるようにするのかなど、今後の検討課題となる。

従来の研究は技術と家庭科、学部と附属学校でそれぞれ個別に行なわれてきたため、相互の関連についての追求が充分でなかった面がある。本研究会は共同研究方式をとって、それぞれの立場からの意見を交換し、検討をすすめていくことにしている。

最後にこの調査を実施するにあたり、各大学教育学部附属中学校長はじめ技術・家庭科担当の先生方に感謝を申し上げる。

## 引用文献

- 1) 教育大学協会 家庭部門研究協議会 昭和60, 61年度九州地区報告書
- 2) 第24回全日本(第29回九州地区)中学校技術・家庭科研究大会沖繩大会要録 昭和60年11月, P 32
- 3) 文部省高等教育局大学課 全国大学一覧 昭和59年
- 4) 文部省 中学校指導書 技術・家庭編 昭和53年5月 P 133
- 5) 第24回全日本(第29回九州地区)中学校技術・家庭科研究大会沖繩大会要録 昭和60年11月 P 32
- 6) 崎浜秀栄 他2名, 「技術・家庭科に対する意識調査とその履習方法等の改善について」 琉球大学教育学部紀要 第22集 第2部
- 7) 崎浜秀栄 「技術・家庭科に対する意識調査とその履習方法等の改善についてⅡ」 琉球大学教育学部紀要 第25集 第2部

〔附表〕 調査用紙

技術・家庭科の男女相互乗り入れに関する調査

調査のお願い

この調査は全国の国立大学教育学部、教育大学附属中学校を対象に技術・家庭科の男女相互乗り入れについての実態を把握することを目的としています。

ご多忙中とは存じますが、技術・家庭科担当の先生方でご相談の上調査にご回答下さるようお願い致します。

昭和61年6月5日

◎ 記入要領

- (1) 昭和60年度についてお答え下さい。
- (2) 選択肢のある問いについては、該当する答えの番号を  内に記入して下さい。
- (3) その他については問いに従って記入して下さい。なお記入欄が足りない場合は、裏面に記入してかまいません。

学校名 \_\_\_\_\_ 大学附属 \_\_\_\_\_ 中学校

1 学校規模

- |           |          |            |            |                      |
|-----------|----------|------------|------------|----------------------|
| 1. 5学級以下  | 2. 6～9学級 | 3. 10～15学級 | 4. 16～21学級 | <input type="text"/> |
| 5. 22学級以上 |          |            |            |                      |

2 技術・家庭科専用教室数（準備室は含まない）

- |        |       |       |       |                      |
|--------|-------|-------|-------|----------------------|
| ア 技術室  | 1. 1室 | 2. 2室 | 3. 3室 | <input type="text"/> |
| イ 家庭科室 | 1. 1室 | 2. 2室 | 3. 3室 |                      |
|        |       |       |       | <input type="text"/> |

3. 週当たり平均担当時間数（技術・家庭科のみ）

- |            |           |            |  |                      |
|------------|-----------|------------|--|----------------------|
| ア 技術系列担当教師 |           |            |  | <input type="text"/> |
| 1. 5時間以下   | 2. 6～10時間 | 3. 11～15時間 |  |                      |
| 4. 16～20時間 | 5. 21時間以上 |            |  |                      |
| イ 家庭系列担当教師 |           |            |  |                      |
| 1. 5時間以下   | 2. 6～10時間 | 3. 11～15時間 |  |                      |
| 4. 16～20時間 | 5. 21時間以上 |            |  | <input type="text"/> |

4 男女相互乗り入れの趣旨をどのようにとらえていますか。

1. 男女の特性にこだわらず何でも一緒にやっいていこうとする素地を養う。
2. 男女の特性を理解し、それぞれの特性が生かせるよう助け合う素地を養う。
3. 男女の特性を理解し、社会生活や家庭生活における男女の役割とそれぞれに応じた協力の仕方の素地を養う。
4. 自己の特性を発見し、個性の伸長が図れるようその素地を養う。
5. その他 ( )

5 男女相互乗り入れは、どのような方法で行いましたか。次の各問いにお答え下さい。

ア 乗り入れ領域数

1. 1領域
2. 2領域
3. 3領域
4. なし

イ 相互乗り入れ時の学習形態

1. 男女別学
2. 男女共学
3. その他 ( )

ウ 相互乗り入れの学年、領域名、題材名、時間数を記入して下さい。

	領域名	学年	配当 時間数	題材名	実習時間	
					予定	実施
男子						
女子						

エ 授業の担当方法について

1. 技術系列は技術系列担当教師が、家庭系列は家庭系列担当教師が行っている。
2. 男子は技術系列担当教師が、女子は家庭系列担当教師が行っている。
3. その他 ( )

オ 相互乗り入れをする場合、男生徒と女生徒では題材を変える必要があると思います。又その理由を書いて下さい。

1. 変える必要がある
2. 一部変える必要がある
3. 変える必要はない

理由

カ 男女共学で乗り入れをする場合、グループの編成はどちらがよいと思いますか。  
又その理由を書いて下さい。

1. 男女別々がよい
2. 男女混成がよい
3. その他 ( )

理 由

---

キ 男女共学の場合、リーダーの選び方はどちらが良いと思いますか。

1. 家庭系列は女子に、技術系列は男子にする。
2. 能力適性を考えて決めるべきで、性別にはこだわらない。
3. その他 ( )

ク 相互乗り入れ実施後の生徒の反応及び改善すべき点があれば書いて下さい。

1. 生徒の反応

2. 改善すべき点

6 昭和60年度に実施した学習指導について下の欄に記入して下さい。

	履習 学年	配 当 時間数	題 材 名	実習時間	
				予 定	実 態
技 術 系 列	木工 1				
	木工 2				
	金工 1				
	金工 2				
	機械 1				
	機械 2				
	電気 1				
	電気 2				
	栽 培				
	その他				
	家 庭 系 列	被服 1			
被服 2					
被服 3					
食物 1					
食物 2					
食物 3					
住 居					
保 育					
その他					

7 相互乗り入れの指導計画作成にあたって配慮されたことがあればご記入下さい。

ア 履修時間数について

---



---

イ 履修学年について

---



---

ウ 選択領域について

---



---

エ 題材について

---



---

※ 次の資料を添付していただければ幸いです。

(1) 年間指導計画表

(2) 相互乗り入れ実施後の評価・評定の方法についての資料